

【二〇〇九年度・ハイデガーフォーラム・発表原稿】

## 詩作に対して思惟とはなんであるのか？

一序

関口 浩

ハイデガーがいつ頃からヘルダーリンの詩作に本格的に取り組んだかといえ、それはおそらく一九三〇年代の初頭であつたらう。彼がこの詩人についての解釈をはじめて発表したのは、周知のよう

に、フライブルクでの一九三四年と三五年の冬学期講義「ヘルダーリンの讃歌『ゲルマーニエン』と『ライン河』」においてであつた。

ヘルダーリンは、神々の不在を根本的に経験し、そして将来における聖なるものの到来を予感し、それを詩作した詩人としてハイデガーの前に現れてくる。ヘルダーリンは、まさに自分の思惟すべきことを先んじてすでに詩作している、とハイデガーには感じられたようである。ハイデガーの〈思惟の道〉において、遅くとも一九三〇年代初頭以後、ヘルダーリンは、彼の前方から到来して、その進路を導く者となつたということができるとはならないか。じつさい、ハイデガーはその晩年にみずから次のように証言している。「自分の哲学はヘルダーリンの詩作を可能にするもの以外のなものでもない」<sup>1</sup>。

ヘルダーリンの詩作と取り組むにしたがつて、ハイデガーの思惟に詩作的性格が目立ってくる。思惟の術語にヘルダーリンの詩作に由来する語彙が数多く採用されるようになる。Ereignis「ムネーモシュネー」<sup>2</sup>、Geschick「ギリシア」<sup>3</sup>のような主要な語が——これ

らの語はすでに『存在と時間』において使用されてはいたが、しかしそこでのとはまったく異なる意味で——ヘルダーリンの詩作から思惟の語として用いられるようになる。また、その文体も、外見上、きわめて詩的に見えるものとなってくる。たとえば、全集第一三巻に収録されている「ヴェインケ」（一九四一年）と「思惟の経験から」（一九四七年）、全集第八一巻に収録されている「ゲダハテス」（一九四五—四六年、一九七二—七五年）などである。これらの作品集には、行ごとのシラブル数がそろえられ、押韻された作品が数多く見られるのである。

詩作も思惟も、同じようにことさらに言葉とかかわり、同じように〈存在〉に根ざしている。ヘルダーリンの詩作「パトモス」には次のように詠われている。

このように（「天空の」明澄さの）まわりに  
時の峯々が連なつて

最愛の者たちは「憔悴して」近くに住む

たがいにもつとも遠く隔てられた山々の上に（vgl. GA39, 52）

ハイデガーはこの詩句の「最愛の者たち」を詩人と思惟者であると考える。詩人と思惟者は、日常性をはるかに超越した高み、存在の明け開けとしての「明澄さ」の場所において「近くに住む」。しかし、その同じ場所にありながら、詩人と思惟者は、「たがいにもつとも遠く隔てられた山々の上に」住んでいるというのである。いったい、両者の隔たりはどういう点にあるのだろうか。

ハイデガーはヘルダーリンとの対話をつうじて、詩作に対して

思惟とはなんであるのか、なんであらねばならないのか、という問題に答えねばならなかったのではないか。だが、ハイデガーはこの点について明確に答えてはいない。ビブリオグラフィを見れば、たしかに、この問題に触れたテキストがまったくなくないというわけではない。たとえば、「思惟と詩作」と題された講義が一九四一年と四二年の冬学期に予定されたが、これは第一講が行われたのみで中断されている。また、「思惟とは何であるか」と題された講義もあるが、そこでもこの点について詳しく論じられているとは言えないのである。

そこで、本発表ではこの問題を取り上げてみたい。詩作と思惟との関係について、試論的に検討してみたいと思う。

## 二 Bildの問題

詩作に対して思惟とはなんであるのか、この問題を考えるにあたって、「ヴェインケ」と「ゲダハテス」とにハイデガーが加えているコメントが手がかりとなる。一見詩作とも思えるこれらの作品であるが、ハイデガーはそれらを思惟作品であるという。それというの、それらが *Bildos* 像なしであるから、というのである。Bildすなわち、像、あるいは形象の有無が、詩作と思惟との相違のメルクマールとされているのである。

これにしたがえば、詩作は *bildlich* すなわち、像あるいは形象をもちいた言語による作品ということになるだろう。そのようにして、一般に詩作は象徴 (*Symbol*) による表現であると解される。たとえば、ヘルダーリンの詩作に書かれているライン河は、まず感性

的なものであつて、それがさらに非感性的なもの——内容あるいは意味——を象徴している、というように考えられるだろう。

象徴は、感性的なものと非感性的なものとの区別にもとづいて作られるが、この区別はプラトンの思惟においてはじめて生じたものである。西洋におけるあらゆる芸術解釈はこのプラトンの思惟を基盤として成り立っていると考えるだろう。寓意、象徴、直喩、隠喩などといった詩学における諸々の伝統的概念も、すべてこの区別にもとづいているのである。

ハイデガーのよく知られた論文に『世界像の時代』(一九三八年)があるが、この論文の説くところの、近代において世界が像になるという場合の「像 *Bild*」もまた、プラトンの思惟の軌道上にある。近代哲学においては、認識する主観の表象作用 (*Vorstellen*) にとつて、諸々の事物は対象となり、像となる。事柄の要点を指示するために、近代初頭の画家 A・デューラーによる絵画理論書『測定法教則』(一五二五年) から、次のような図を参照してみたい。

この書は、イタリア・ルネサンスの画家たちが考案した遠近画法を北方ドイツの画家たちに紹介するために書かれたものであるが、ここにコピーした図は近代的なヴィジョンのあり方を非常によく表わしていると思われる。

図に描かれた画家の眼は照準器となる剣のような棒のところ固定されているが、これを認識している主観と見なすことができるだろう。作業台の上に設けられた木枠であるが、世界はこの窓のようなものを通して見られるのである。この窓に現れた像こそが「世界像」ということができるだろう。画家の前に対して立っている像こそが、対象 (*Gegenstand*) である。画家は眼前の窓にグリッド状

に張られた糸を数えて製図する。そのようにして、世界は像としてX軸とY軸との上に、すなわちデカルト座標の上に現され、主観は計算する理性として尺度を用いて像となった世界を測定するのである。

だが、ヘルダーリンの作品が bildlich なものであるといっても、もちろんこのような近代的な意味での「像」をもって詩作しているというのではない。デューラーのヴィジョンはわれわれにとつてきわめて馴染み深いものであるが、しかし、ヘルダーリンの詩作における Bild は断じてそのようなものではない。ヘルダーリンの詩作は近代的な本質をもたないばかりか、そもそも古代ギリシア以来の詩学的伝統にさえもはや属することのないものである。このことこそがハイデガーの発見だった。ヘルダーリンはある友人に宛てた書簡の一節で、こう述べている。「思うに、われわれはわれわれの時代に至るまでの詩人たちを注釈しないだろう。総じて歌い方は別の性格をもつだろう<sup>2)</sup>」。ヘルダーリンの詩作には、その本質において、もはや象徴はもちいられてはおらず、そのような意味での Bild はないと言っているのである。

さて、そうすると、詩作が bildlich であるといっても、ハイデガーはこの Bild という語をプラトンの区別における感性的なものとして用いているのではないということが明かになったろう。これにしたがって、思惟が bildlos であるといっても、それはプラトンの区別における非感性的なものであるということ、すなわち抽象的なものであるとか、観念的なものであるとか、精神的なものであるというのではないということも明かになったろう。

では、あらためて、思惟が bildlos であるとはどういうことなのか。

そもそも、Bild がそのような感性的なものではないとすると、それはどのようなものなのか。さらには、そもそも詩作的な言うことと思惟的な言うこととの間の差違は、原初的には、いかなる事態に由来するのだろうか。

### 三 詩人的に言うこと

ハイデガーは、その晩年に書かれたあるテクストにおいて、詩人的に言うこと (das dichterische Sagen) と像との関わりについて、次のように述べている。

「そのような〔詩人的に〕言うことは、Bilden〔形作る〕という根本動向を有している。《Bilden》は古高ドイツ語の動詞《pion》へとさかのぼる。pion とは、突くこと (Stoßen)、駆り立てること (hervertreiben) ということを意味する。Bilden とは、〈こちらへとー前へとーもたらずこと (her-vor-bringen)〉、すなわち、伏蔵されたもの、自己伏蔵から、不伏蔵的なものへと、開けたものへともたらずことである。そのように理解された〈こちらへと前へともたらずこと〉の〔制作されたもの〕、形作られたものが、Gebild〔形象〕である。この形象が、輝き現れへと至り、そのことよって映現へと至るかぎり、この Gebild は、ある光景 (Anblick) を呈示する。この Gebild はそのようなものとして同時に根源的な Bild〔像〕である」(GA13, 171)。

伏蔵されたものから、不伏蔵的なものへと、こちらへとー前へとーもたらずこととは、ポイエインとしてのテクネーの動向であるが、これによつてもたらずされるものが Gebild であり、それこそが根源的

なBildであるという。このようなBildが光景を呈示するのだが、光景とは、「それにおいて何かあるものがそれ自体を呈示し、それ自体をそこに与える」(GA54, 152) ようなものである。つまり、詩人的に言うことにおいて言われたものは、そのもの自体である、ということだ。

「詩的な言うことによって言われたことはいかなる内容をももたない。それは形象 (Gebild) なのである」(GA13, 172)。

ヘルダーリンの詩作は、感性的なBildを描写しつつ、象徴的に、何らかの非感性的な理念のようなものを伝えているわけではない。そういう意味でならかの「内容」をもつわけではない。それでは、それはたんに自然を詩的に模写したにすぎないものなのか。もちろん、そのようなものではない。

「詩人が大地のことを言い、故郷の耕地や谷や河のことに言及するとき、それらすべてはあらゆる種類の詩的自然描写ともまったく異なるものである」(GA39, 106f.)。

それでは、詩人的に言うこととは、いったいどういうことなのか。河の詩作を例にとれば、ヘルダーリンが詩作した河の流れはそれ自体と別のものを象徴的に表わすのではなく、それ自体が詩人なのである、とハイデガーは説くのである。

ヘルダーリンの詩作において、たとえば、詩人の眼前のドナウ河は「イスター (der Ister)」と名付けられるが、イスターという語はローマ人がドナウ河の下流を指して名付けたものであり、さらに歴史を遡れば、この語はギリシア人たちが同じ所を名付けた語「イストロス (Istros)」に由来する (GA53, 10)。ドナウ河は、すなわち下流のギリシア、ローマとの関連において名付けられ、そうし

た関連へともたらされているのである。

河の流れることと詩人が詩作することとは同じことであり、同じ一つのものに属している。この場合、同じ一つのものとは大地において人間たちを居住可能にするということである。河が流れることは、麦畑と葡萄園とを耕作可能にし、パンと葡萄酒との生産を可能にする。また、ギリシアとの通路を開くことによって、原初的なものの回想を可能とする。そのようにして、人間が大地において祝祭的に居住することを可能にするのである。

詩人もまた、人間たちを居住可能にする。詩作の本質はそれが讃歌であることにある。讃歌とはなにか。「讃歌 (Hymne) という名称は、ギリシア語のヒュムノス (hymnos) をドイツ語にしたものであり、それは歌、歌曲を意味し、とりわけ、神々を讃え、英雄を褒める歌をいう。あるいはまた、競技の勝利者を称賛する歌をいう。ヒュムネイン (hymnen) とは、歌う、讃える、褒める、祝う、浄めるであり、そのようにして祝祭を挙行することなのである」(GA53, 204)。詩人は、大地を人間の居住可能な場所とすべく、大地を神々のために育てられたものとして叙述し、そのようにして大地の本質を解き明かし、さらには讃歌において神々へと呼びかけ、祝祭的なものを実現することによって、大地のおける人間たちの居住を可能にするのである。そのようにして、「この河は詩人である」(GA53, 204) ということができるのである。

だがしかし、そうすると、そのような河や大地は、詩人によって詩作されたものであって、詩作のなかのものであって、現実の河や大地とは別のものではないか、と問われるかもしれない。現実にあるドナウ河をみて、そこに一つの象徴的意味を見出したのではな

いか。たしかに、かりにそういうことが可能だとして、詩作が開く言語空間の圏外から大地をみれば、そういうことになるだろう。しかし、人間が居住することにとって、大地を耕作することと讃歌を歌いつつ挙行する祝祭とが、現存在そのものである言語空間において、一つの全体をなすということを認めるならば、「この河は詩人である」ということを、象徴としてではなく、すなわち別のことを表わすものではなく、そのものとして受け止めることが出来るにちがいない。

主観の表象に対して立っている単に測定されるものとしての対象ではなく、表象に先立っているいわば〈横たわっているもの〉は、相互に属し合っているのである。たとえば、ゴッホの描いた一足の靴においては農婦の世界が感得され、さらには全体としての存在者のあり方が、大地と天空、人間たちと神々との相互に属し合う関係すなわちゲフィーアト (Geniet) として会得されるように、詩作の形象において言葉へともたらされるのは、そうした共属性なのである。ハイデガーは言う。「詩の形象 (Gebild) において言葉へともたらされるのはゲフィーアトである」(GA13, 178)。

#### 四 思惟者の言うこと

詩人的に言うことは、このように Bild によつてそのもの自体を呈示する。これに対して、思惟者の言うことは bildlos 像なしに語るといふ。『ヴェインケ』や『ゲダハテス』のような極めて詩的に見える作品が、ことさらに思惟の言葉によると言われねばならないのはなぜなのか。たとえば、ハイデガーのテクストに次のような言葉

がある。

暁天の光が音も無く山並の上に拡がる時……

世界の蝕は、如何に濃くなるとも、妙有の光には決して届かない。

吾等は、神神に会ふには餘りにも晩く、妙有に見えるには餘りにも早く、来過ぎた。されど、人はもと妙有の創始せる一片の詩である。(辻村公一訳)

これは「思惟の経験より」の一節であるが、このような文章がプラトン主義的な象徴表現ではなく、さらに詩人的な言でもなく、bildlos に語る思惟の言葉であるというのは、いったいいかなる意味でそうなのか。

ハイデガーによるこのような「詩的」作品は、ヘルダーリンの詩作に影響され、それを手本として書かれたものなのだろうか。おそらくそうではないのだろう。ハイデガーがこうした文体を試みたとき、彼が学んだのは古代ギリシアにおける原初的思惟者の言葉だったろう。ディオゲネス・ラエルティオスの伝えるところによれば、タレスなどいわゆる七賢人はいずれも詩作を試みたという。彼らの思惟の表現は、箴言 (ἀποφειγμια) として、しばしば「ラコニア風の寸言法」(Platon, Protagoras, 343A) といわれる「詩的」文体にようにした。また、ソクラテス以前の哲学者の多くもさまざまな「詩的」文体を用いている。ハイデガーはそれらを参照したのである。

そこで、ここでは詩作に対して思惟の言葉がいかなるものである

かを検討するにあたり、まずはハイデガーの思惟作品よりも、古代ギリシアの思惟者たちの言葉を見てゆきたいと思う。

古代ギリシアの原初的な思惟が、その「詩的」文体において、どういうことを言おうとしていたのか、ハイデガーの解釈をみてみよう。ハイデガーは古代ギリシアにおける原初的な思惟者として、アナクシマンドロス、ヘラクレイトス、パルメニデスの三人を取り上げて、それぞれについて論じているが、ここではアナクシマンドロスに注目したい。

アナクシマンドロスによるものとして次のような箴言が伝えられている。

「しかし諸々の事物にとつて、それらの生成がそれから生じるところのもの、そのものへとそれらの消滅もまた、必然にしたがつて生じる。すなわち、それらは時の指図にしたがつて、みずからの不正のために罰と償いとを互いに与え合う」(vgl. GA5, 329)。

ハイデガーは論文『アナクシマンドロスの箴言』のなかでこれについて次のように述べている。

「現前するものは、それぞれがそれぞれに向かつてそれなりの暫時の間 (Weile) のなかで、別のものと暫時の間だけでも現前することによって、現前という一なるものにおいて相互に属し合っている」(GA5, 353)。

つまり、諸々の事物は、根源から生じたものとして、生成と消滅との間の限られた時間のみ、現前することができにすぎない。この暫時の間という時の制限に従うかぎり、それら現前するものは、正しいものでありうる。が、しかし、そこにこの制限を逸脱するものが現れるのである。

「到来したものは、そのうえ、みずからの暫時の間に固執し、ひたすらこのことによって、恒常的なもの (das Beständige) という意味でいつそう現前にとどまろうとする。そのつど暫時の間のものが、みずからの現前にあくまで固執する。その都度暫時の間のものは、このようにして、みずからの移行的な暫時の間から自分自身を退去させる。それは我意をあくまで固執してふんざりかえる。それはもはや他の現前するものを顧慮しない。それは、あたかもこれこそ暫時の間の逗留を続けることだと言わんばかりに、引き続きの存続の恒常性をかたくなに主張する」(GA5, 355)。

箴言のいうところの「不正」、アデイキア (ἀδικία)、〈節理ならざるもの〉とは、このように、現前するものが、暫時の間の節理において生じながら、この節理から逸脱して、恒常的現前に固執することであり、そのようにして、それらがそこからして現前してきたとところの根源から離脱して、それから自分自身を閉ざしてしまおうとすることである。

ここで現前する諸々の事物としてまず第一に考えられているのは人間のことである。アナクシマンドロスの箴言は、恒常的な現前への人間の欲望を不正であるとして、そうではなく、ト・アペイロン (τὸ ἀπειρον)、すなわち根源としての無限定者へと開かれてあるべきだと説いているのである。このことは、その本質においては、彼の師タレスの説くところと同じであると言えよう。さらにいえば、七賢人たちの箴言が教えるところとも同じであると言えるのではないか。

七賢人について次のような逸話が伝えられている。あるとき、賢人たちがみずからの知恵の後ろ盾となつているアポロンに感謝すべ

く、うちそろってデルポイに詣でたという。そのおり、これらの賢人が供物として神殿に奉納した箴言として次の三つが伝えられている。

まず、タレスの言葉として「汝自身を知れ (γνῶσι σεαυτόν)」。ソロンの言葉として、「度をこすな (μηδὲν ἄγαν)」。そして、キロン言葉として「保証はやがて身の破滅 (ἐγγυὰ τάχα δῖατη)」である。

これらは、要するに、人間がその有限性のゆえに根源に達しようという、みずからの固有性を忘れて、不死に憧れることを戒めている。つまり、恒常的現前性への欲望を戒めて、アナクシマンドロスの言葉でいえば、アルケーとしてのト・アペイロンであるところの根源に対して開かれてあることが人間の固有性であることを思い出させているのである。

「保証はやがて身の破滅」ということも、暫時の間の現前者である人間が、将来にわたって恒常的に現前しうる者であるかのように何かを「保証」しても、きつと果たせぬ約束となり、破滅を招きかねない。そのようなことも、一種の身の程知らず、自己の固有性を忘却することになる、と戒めているのである。

七賢人によって奉納されたこれらの言葉は、その後アポロン神殿の入口の左右に刻まれたという。それは、あたかもアポロン自身が語る言葉のように見えたという。古代ギリシアの原初的な思惟者たちの言葉は、じつさい、神々の語りかけを代弁するものではなかったか。

こうした原初的な思惟者の言葉が神々の要求を代弁するものだと考えに足る証拠は数多くある。

パルメニデスは自らの思惟を、彼自身による一人称ではなく、女神に語らせている。

アポロンの姉妹アルテミスの神殿で、エペソスの市民たちを叱責したヘラクレイトスの言葉もやはり同様のものであった。「暗い人」とあだ名される彼の言葉は、「あらわに語るのでもなく、また隠すのでもなく、ただしるしを示す」(断片九三)というアポロンの神託における語りを模倣して、この神の呼びかけを代弁するものだったろう。

ヘルダーリンが悲劇の素材にしたエンペドクレスは、作品『浄め』の冒頭で、「私はもう死すべき者ではなく、不死なる神であつて、お前たちすべての間を歩き来する」(断片一一二)とさえ言っている。

周知のように、『弁明』においてソクラテスもまた自身がアポロンの代弁者であることを明言している。

「・・・だからそのために私は今でもなお神の命令により、歩き回つて、この国の人々のうちにせよ、他国の人々のうちにせよ、誰か知者だと思ふ人があれば、その人を捜して調べているのである。そして私に知者でないと思われるときには、神の手伝いをしながら、そのことを示してやるのである。この仕事のために、私には国のことにせよ、家のことにせよ、何一つ語るに足るほどのことは、する暇がなくなつてしまつて、神への務めのためにひどい貧乏暮らしをしているのである」(『弁明』20b)。

ソクラテスのあまりにも有名な言葉「無知を知るべし」も、当然アポロンの呼びかけを代弁したものと見なすことが出来よう。

これらの思惟者の言葉は、神々や英雄のあり方を叙述してそれを讃える詩作とは異なり、形象なしに、二人称としての人間に対して

呼びかけている。思惟者は神の代弁者として、それもとりわけアポロンの代弁者として、根源としての無限定者、すなわち無化する無へとまなざしを向け、それに対して開かれてあるように要求しているのである。

そもそも、ギリシア的な神々と思惟者とは、その存在において近い関係にある。ギリシア人にとって神々は、テオス (θεός) として、見るもの、テアオン (θεῶν)、すなわち観照するものである。思惟者もまた理論家 (Theoretiker) として観照する者である。理論家としての思惟者は、テオーレイン (θεορειν) する者として、神々の本質を分かち持つ。ポリスに属する者たちのなかで、思惟者だけが神の代弁者たる資格をもちうる根拠は、この点に存するのである。

詩人は観照する者ではなく、神々へと呼びかけ、讃歌を歌う者である。これに対して、思惟者は、理論家として存在者を超えて観照し、神々のように、神々の代弁者として人間たちへと語りかけるのである。

#### 四 結論

ハイデガーは、ヘルダーリンの言葉にしたがって、詩人と思惟者とは最も遠く隔てられているという。同じ〈存在〉に根ざしながら、詩作に対して思惟はどのように相違したもののなか。その相違を、最初の原初、すなわち古代ギリシアでの思惟者のあり方を参照して、人間と神との間という、ゲフイーアトの次元における隔たりとして考えてみた。

以上に述べたことを三点にまとめておきたい。

1. 詩人は、故郷の光景を、*Bild*をもって叙述しつつ、大地を神々のために育て、神々を讃え、祝祭を実現する。詩人は人間の立場にとどまり、天上の神々を見上げる姿勢をとっている。

2. 古代ギリシアの原初的な思惟者たちは *bildlos* に、形象なしに語る。それは、彼らが神の代弁者として、二人称の人間たちにむけて彼らの現存在に対して命令的に語りかけるからである。その言葉は、原初的には、箴言という文体によった。

3. ハイデガーの『思惟の経験より』や『ゲダハテス』、『ヴィンケ』のような「詩的」文体のテクストは、ヘルダーリン等の詩作の言葉を多く転用しているとはいえ、本質的には詩的なものではなく、むしろ古代ギリシアの箴言、アポプテグマに近いものである。ハイデガーは、哲学の終わりの時代に、別なる思惟の可能性を追求するという大きな課題の一環として、一つの試みとして、現代的なアポプテグマを作成したのである。

#### 注

- 1 Carl Friedrich von Weizsäcker, *Erinnerungen an Martin Heidegger*, *Neue Zürcher Zeitung*, 1977 (遠山郁代訳「ハイデッガーの想」出、『理想』一九七八年七月号、九二頁)
- 2 一八〇二年秋のペーレンドルフ宛て書簡。Hölderlin, *Samtliche Werke* Bd. 6, Kohlhammer Stuttgart, 1954, S. 433. vgl. Heidegger, *Zur Sache des Denkens*, Niemeyer Tübingen, 1969, S. 41